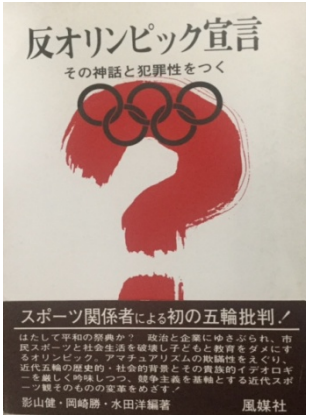
五輪と万博と私の研究(1)

私の研究を振り返ってみると、名古屋と大阪という地域で暮らしたことが大きく影響している。地域研究を心がけてきた者として、自ら住む足もとの地域に関心をもつのは当然ではあるが。なかでも五輪と万博という国家プロジェクトが、名古屋と大阪で連続して計画・実施されてきたのが刺激となった。公共事業と社会資本を研究してきた一人として、五輪と万博から離れるわけにはいかなかった。今も来年の東京五輪、そして2025 年に予定される大阪万博から目が離せない。

1979 年 4 月から、名古屋市立女子短大で教えることになった。なんとか就職できて、女子学生を前にキンチョーしながら講義した。その頃、名古屋で 1988 年に五輪を誘致しようと地域をあげて取り組んでいた。それに対して、名古屋大の水田洋先生や愛知教育大の影山健先生らが反対の論陣を張っていた。私も五輪による開発は、名古屋市の行財政や住民生活に悪影響を及ぼすと、大学や労働組合などで主張していた。水田先生が主催するシンポジウムで、わが恩師である宮本憲一先生が五輪誘致を「お祭り型公共投資」と批判されたことにも勇気づけられた。

たまたま名古屋で就職して最初に住んだのが、千種区東山であった。新池の前の新池ビルという古びたアパートだ。すぐ近くの平和公園南部が五輪メイン会場予定地であったのも、名古屋五輪への関心をさらに高めた。写真は東山通から平和公園に向かう新池交差点あたり。すこし行くと自宅の新池ビルがあった。

名古屋市の行財政や五輪計画を調査するなかで、1981 年に刊行された『反オリンピック宣言』風媒社に長めの論文を書かせてもらった。Ⅳ章 2 の「オリンピックをめぐる名古屋市の財政・都市問題」である。いま考えると分析が甘いが、私の「先生の先生」である水田洋先生とご一緒に仕事ができたことが、なんとも嬉しいかぎりだ。



この本が刊行された後、1988 年五輪はソウルで開催されることになり、「幻の名古屋五輪」となった。もし、名古屋五輪が平和公園南部で開かれていたら、名古屋東山一帯の貴重な自然と景観は大きく破壊されたことであろう。

その後、トヨタと地域社会、名古屋市住宅対策審議会などの調査研究に参加した。愛知県は「産業首都」をめざし開発に力を入れるようになり、3 点セット・プラスワンといわれた、中部新空港、リニア中央新幹線、第 2 東名・名神高速道、そして愛知万博という大規模プロジェクトが計画・構想される。とりわけ空港と万博は地域社会を揺るがすことになり、常滑や瀬戸の住民たちと一緒に調査研究することになる。

（2019 年 8 月 21 日）